米欧亜回覧

第４９号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集　総務部会

普及版、五月刊行予定
現代語訳「米欧回覧実記」

当会企画、水沢周訳「現代語訳・米欧回覧実記」全五巻は、二〇〇五年五月に慶応義塾大学出版会刊行から刊行され、初版千セットを売り切り、再版六百セットも残部僅少となったこともあり、かねてから要望の強かった普及版を出すことが決まった。

今回は分冊の購買も可能であり、興味ある巻から自由に入手読み始めることができる。価格は一冊千六百円程度になる模様で、いまからその出版が期待される。

全体例会（11月18日・国際文化会館）

なお、懸案であった索引集（事項別、地名別、人名別の索引）も別冊で出版予定である。これは水沢周氏、小林養丈氏、正木孝虎氏の労作によるもので、初版時には刊行できず日の目をみずにいたものである。

「雑ニシテ統ナキ」と久米自身が述懐したように諸事雑然たる「回覧実記」を読むのに「コレハ便利ダ！」の待望の冊子であり、五百円程度の価格になるものと予想される。

高田誠二氏が講演！
十一月の 全体例会

十一月の全体例会は、十八日（日）、国際文化会館講堂で行われ、五十名余が参加した。恒例の会務報告のあと、高田誠二氏の「評伝・久米邦武」についての講演があり、興味ある内容で、質問も多く盛会だった。

なお、二次会が鳥居坂下の華珍楼でおこなわれ、こちらも二十数名が参加して盛りあがった。

（詳しくは二・三頁参照）

新年懇親例会は、ロシアをテーマに

二〇〇八年の新年懇親例会は、ロシアをテーマに、一月二十五日（金）十八時三十分（開場十八時）から、日本プレスセンタービル十階のレストラン・アラスカで開催することになった。

恒例の『実記』の朗読や映像の上映も予定されており、国際的に活躍するピアニスト碓井俊樹氏のピアノ演奏が華をそえてくれることになった。

新時代の日露友好の証になる意義ある宵にいたしたく、知人・友人、ご家族もお誘いの上参加されたい。

キャッチフレーズ、おもしろ企画、大募集！

現代語訳「米欧回覧実記」普及版の刊行に際し、「岩倉使節団」や「米欧回覧実記」をもっと知ってもらうため、またその販促のキャッチフレーズやおもしろい企画、同時に、ＤＶＤ「岩倉使節団の米欧回覧」の上映や販売推進についての斬新な企画やアイデアを募りたい。

新春に考えていただいた夢のある案を持ち寄り、自由な意見交換の場として、春が始まる二月四日（月）に、「立春大放談の会」（八頁・催し案内欄参照）を国際文化会館で開催したいので、ふるって参加ください。

旅の人、記録の人、久米邦武

泉　三郎

高田誠二氏の著書「評伝・久米邦武」は「旅の人」の章で始まる。それは青少年時代から七十歳を越えた晩年までよく旅をした久米の実像を的確に捉えた表現だといえる。

久米は十代のころ長崎へ、二十代で薩摩に、そして江戸に留学し、その往復の旅については記録「跋渉備考」を残している。それは、はからずも「米欧回覧」以前にすでに旅のルポルタージュの予習をしていたことになる。

好奇心が盛んで筆まめな久米は、旅が大好き・・・そして観察は鋭く、メモ魔で、自ら描く絵図面も含めての記録は詳細である。

また帰国後も、主な旅だけでも、四十一歳の時には天皇の行幸に供奉して「東海東山巡幸日記」を残しており、四十八歳の時には日本史の資料探索のため九州各地を旅し、六十歳の時には歴史地理学会の設立に参加し、以来日本列島をあちこち旅し講演したり各種の記録を残したりしている。

当時としては例外的な長命を生きた久米（九十三歳まで）だが、七十三歳の時には長年の盟友だった大隈重信夫妻と山陰の旅をしているし、その後も地方史研究を兼ね各地を旅した。そして八十七歳の時には宇治川界隈を旅し、その船旅の様子を次のように書き残している。

「小艇に上る、左右の峯嶽近く迫り、水は紺碧を湛え、深き所は六七丈に及ぶ、山みな闊葉樹を生じ、高峻ならざるも、巫峡の舟は日中夜半ならざれば日月をみずという景趣を聯想しつつ喜撰山の麓に著けり、山には喜撰の憩ひし巌洞を存すとなん。」

カタカナが平仮名に変わっているが、まるで「実記」英国編ハイランドや欧州編スイスの山水景勝描写の記述を彷彿させるものがある。「米欧回覧」から五十年を経て、最晩年にある久米の旅と観察や筆致がなお変わらぬ事を思い、ある種の感慨を覚えるのである。

第45回 全体例会

『久米邦武』評伝を書き上げて

高田誠二氏の講演から

第四十五回の全体例会では北海道大学の名誉教授で、長年久米美術館の参事（研究員）を勤めておられる高田誠二氏に講演をお願いした。なお、録音テープの不調もあり、左の記事は、高田先生の草稿に基づき作成していただいた。

泉三郎さんとのお付き合いはたいへん長く、米欧探訪旅行で二度ご一緒したほか、この米欧亜回覧の会の行事にも何度かお誘いいただきました。この度は、今月十日付けで出たばかりの拙著をご披露くださるとのこと、心から感謝いたします。

職業柄、著書はいくつか出しましたが、記念の会と申しましても、論集完成の喜びを分かち合う研究所仲間での小宴とか、大学の後任助教授指導下の研究生らによるキビキビした合評会とか、そんな集いしか経験がありません。今日は誠に晴れがましい催しで、恐縮に存じます。

それで、本日はどんな心掛けで参上すればよいか、まず、我が家の年長者（故人）と密かに相談してみました。

講演する高田誠二氏

◇ふたりの祖母

母方の祖母は、佐賀の町方の出で鷹揚でした。今日の会のことを告げれば、「お前の書いた本を皆様に漏れなくお配りしなさい」と言うでしょう。ところが父方の祖母は越後の士族の出で窮屈、「各界の方がお見えになる会で品物を供与するのは控えなさい」と諭す人でした。はて、どちらの助言に従うべきか？　編集者（京都）の手を煩わせるのも気の毒だし、結局、今日は、僅かな部数を同僚の福川さんに運んで貰い、受付でお求め頂きました。

◇初物ご紹介

これで、ふたりのおばあちゃんの呪縛から開放された気分になりました。新作ご披露に取り掛かります。まず、この評伝『久米邦武』で初めて世に公開されたのは何か？二三ご紹介しましょう。

巻頭カラー頁は、青年・久米が江戸昌平黌へ遊学した時の紀行手帳『跋渉備考』の、美しい風景スケッチと漢文稿です。皆さんが熱心に研究しておられる大作『米欧回覧実記』の、あのワイドかつシャープな観察の能力、また、メリハリの利いた漢文調の記述の能力は、修学期すでにかなりまで磨き上げられていたことが、この若書き手帳から読み取れるでしょう。

次は、第一章の佐賀地図と第七章の目黒地図。それぞれ明治初期と嘉永年間の図から制作し直したものです。地名などから時代の気分を感じとって下さい。

久米の履歴に関しては年譜等が発表されていますが、今回、改めて辞令や機関文書を分析しました。拙著では、分析の結果を記号付きで記述しましたので、推理小説のような印象を与えるでしょうが、彼が使節団の記録を担当するに至った経緯など、筋道を付けた積りです。

なお、久米の結婚の時期は、従来なぜか明記されていなかったので、この際、追及してみました。しかし、「両三年」程度より細かく特定することはできませんでした。

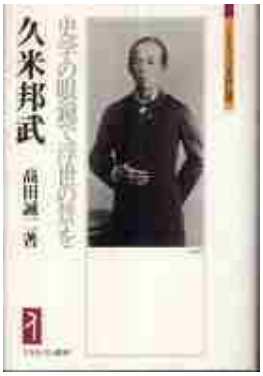
◇久米評伝の素材

さて、久米の略伝は『実記』文庫版の解説などからも知り得ますが、一冊の伝記書で詳述するとなれば、それなりに大小さまざまの話題を収集整理しなければなりません。そのための素材の筆頭は、皆さんご存知の分厚い二冊本『久米博士九十年回顧録』ですが、私は永年それと付き合って来て次第に不審や不満を覚えるようになりました。その理由として、①久米の口述を弟子たちが筆記しタイプし、それを久米が校閲するという手順の故に、叙述の密度とテンポが不揃いであること、②晩年の久米の記憶に不確実さが伴っていること、③久米の逝去で作業が中断して、弟子らが輔綴して刊行したこと等を挙げなければなりません。とりわけ不幸なのは、「口述ベースの編著作業」が、久米の米欧回覧経験の終段（ベルギーの項）で終わってしまったことです。

という次第で、私の努力の大半は、『回顧録』以外の文献を広くかつ公平に調べ、それらから厳選した素材を寄木細工のように組み立てて行く作業に向けられる事となりました。参照した文献は、拙著の巻末に列挙してありますが、それに加えて、主な文献の略号を定め、それを本文中に挿入記載しページ数も添えて、必要な時には何時なりとその文献を探り当てることができるよう、綿密に手当てしました。

◇索引にも工夫

同じ趣旨で、索引制作にも力を入れました。例えば事項索引の「シェフィールド」には五つのページ数が示されていますが、その五箇所をたどってゆくと、久米『実記』における英国のこの産業都市探訪の叙述はもとより、英国製鉄製鋼業と他国のそれとの



ミネルヴァ日本評伝選
久米邦武—史学の眼鏡で浮世の景を
高田誠二著　ミネルヴァ書房　3,150円（税込）

〔構成〕
第１章　旅する人
第２章　修学時代—藩校生・昌平学生
第３章　米欧回覧時代—科学技術レポーター
第４章　公の人—藩の実務家・回覧の記録者
第５章　官学歴史家の時代—批判する人
第６章　在野歴史家の時代—述作する人
第７章　気質・言動・交際
終　章　一等席から見た一幕

比較、炉況の科学的観測法、同地で久米が体験した旅の情感などの記載を探り出すこともでき、更に、漢文訳の技術書の内容や機械工学者の『実記』評まで確かめることができます。

こうした手当てが、久米美術館での今後の展示の充実に役立つであろうことは、経験上、自負しております。それが同時に、『実記』研究家各位のお役にも立つようであれば、著者の苦労は充分に報いられると信じます。

◇久米のマルチ志向

その他、久米の国際感覚の源泉をたどるには、索引の《唐鑑会》から引き出して、藩侯・鍋島直正みずからが久米らを相手に熱心に討論した学習会の様子をお調べになるとよいでしょう。また、久米の行政実務能力を評価するには、明治維新という大変革に直面した佐賀藩で、久米が教職との兼ね合いに苦慮しつつまとめ上げた『藩治規約』の成立過程を追認なさるとよいでしょう。

古地図を投影して解説

このようにして久米は、佐賀藩の旧習を脱し、明治のマルチな国際人へと成長してゆきます。そのプロセスはたいへん複雑ですから、一筋縄で叙述することはできません。歴史の流れを断ち切ったり繋ぎ直したりしながら章立てを整えたのですが、それに伴いがちな読みにくさを補うために、もう一つ別の工夫を加えました。他の章・節への参照指示です。文中に度々挿入した《x章y節を見よ》は、煩わしく感じられるかもしれませんが、洋楽でいう多声音楽（ポリフォニー）の面白みを連想しながら参照指示を活用していただければ幸いです。

◇政界の大物との接触

久米のマルチ志向を助長した先達は、藩侯だけではありません。使節団をリードした岩倉、大久保、木戸らも久米の資質を評価し育て上げました。では、明治前期の政界のこれらの大物たちは、久米とどんな接触面を持ったのでしょうか。

これまた幸いにも、新聞連載の談話記事などが残っていましたので、拙著で活用しました。久米は彼ら先達を「岩公（がんこう）」「大久保さん」「木戸さん」と呼び、あけすけに論評しています。久米の「大物評」が「久米評伝」に味を添えてくれたようです。

◇学界の明暗

こうして政治家との縁を持った久米は、望みさえすれば政界入りすることはできたに違いないのですが、米欧回覧から戻った後は政治への関心を全く示さず、ひたすら『実記』編著に打ち込み、修史官、史学教授として学問に沈潜します。私は、この点についても、公文書の分析を介して実態の解明を進めることができました。

その際、私は、久米とその先輩に当たる重野安繹との協力関係および学風の差異に興味をそそられました。約言すれば、重野は批判的だが几帳面な正史編纂者、久米は脱線も敢えてする戦闘的な史家と呼べるでしょう。

その久米が、「神道は祭天の古俗」論文の事件で官学を追われる話はご存知のとおりで、関係する研究論文は多々ありますが、私の本では、久米が後年に洩らした感想などを紹介し、副題に頂戴した「史学の眼鏡・・」という軽妙な句の含意にも触れておきました。

◇久米周辺の個性ゆたかな人々

長命だった久米のまわりには、さまざまな人物が姿を見せました。盟友・大隈重信との長く深い交際、四天王と愛称された起業家たち、岩倉が始めた能楽復興運動に賛同した公家・高官・学者・実業家ら、郷土史研究の同士、漢詩愛好家の集団、そして『回顧録』編纂に携わった弟子や甥など、更に、継嗣・桂一郎とその仲間の美術家―こうした人たちにも言及することによって、私の拙い著作の中での久米のイメージは、予想以上に、ふくらみを見せてくれたようです。

◇学恩に謝して

そもそも私を『実記』研究に誘って下さったのは、北大文学部の田中彰教授でした（教養部担当という共通の役目柄、同じフロアで過ごすことが多かったからなのです）。『実記』文庫版の完結の頃でした。

後年、水澤周さんから、お骨折りの成果である《『実記』現代語訳》を頂戴して、引用・寸評などの形で度々言及し、恩恵を受けました。

数多い先達・同志のうち、このお二人は、目下、体調不振で静養しておられ、この席でお会いすることができませんでした。一日も早く本復されますよう、祈念いたします。

◇ふたりの祖父

結びに、今度は祖父（同じく故人）の話。どちらも、私が久米美術館で働き始めてから確認した事柄です。

母の父（宮崎政吉）は佐賀出身の実業家でしたが、能楽好きで、岩倉の能楽会の会計を担当していました。会の名簿を調べて初めてその事が確認できたのです。

父の父（高田元治郎）は役人で、台湾の行政にも携わった人です。歴史好きだった模様で、本棚には久米『日本古代史』があったし、隠居時代には徳富蘇峰の連載『近世日本国民史』の切抜きを続けていました。この祖父の名は、久米書庫の『歴史学会名簿』に載っていました。

◇研究は愛着から

私が久米邦武研究に深く引き寄せられたのは、祖父たちの暗黙の導きの結果だったようです。

どうぞ皆さんも、岩倉使節団の誰それ、鍋島藩の何某といった人物とのご縁を捜し出し、それを絆として、特色ある歴史研究を深められますよう、この機会に強くお勧め致します。何、さほど深い縁でなくても宜しい―漱石『猫』にある「天璋院様のご祐筆の妹のお嫁に行った先の・・」という程度でも結構。大切なのは、その「ご縁」への愛着です。

【書評】高田誠二著「久米邦武」を読んで

中村浩子

この本は久米邦武没後四分の三世紀を経て出版された初の評伝である。著者は物理学者で、久米が漢学者・碩学の歴史学者との連想から固さを予想したが、すぐに杞憂は消え、引込まれて読み進んだ。

全編は多くの論文を駆使して堅牢に構成されているが、各章項目の設定、解説の切り口がよくてわかり易い。引用文も的確で、時代、人そして様々の事件の経緯が鮮かに浮彫にされ、『実記』理解を深める助けとなった。また、読む側への配慮がゆき届き、底流に著者の久米や『実記』への心情があって読者に感動や充足を与える好著である。

目ざましい特徴は、久米を科学技術に強い理数の人でもあることを説き、これまでの漢学者という古いイメージを破ったことである。久米の広範な視察記録には驚かされるが、一八七二年夏、ロンドンでの大使発令の辞令「使節紀行纂輯の義」を受けてからは内容表記がかわって観察の目が入り、『実記』の本質にふれる項が現れ出す。恐らく水を得た魚の心境で対応し、詳細な数字や製造工程を書き残す視察の日々を続けたことであろう。

発令のあと岩倉は新任務の二書記と共に休養の旅に向い、かの流麗なスコットランド高地紀行が生まれた。静寂（しじま）に枯葉を踏みならす音と口笛が響き木々の間から大使が現れたという情景は、イタリアでおいしい桜んぼを夢中で食べておなかをこわした挿話と共に、旅の日の側面として私は好んで記憶している。

余談は置いて、四章までの幼時から『実記』完成までの道程を読んで、『実記』も亦一日にしてならず、の感を深くした。

続く五章で官学の、六章で在野の歴史家の時代が述べられている。この官学から在野への断層を招いた明治二十五年の「久米事件」については多くの頁は費されず、当時の激しい状況は久米家に止宿していた甥の証言により書かれている。

壮士群集に学生たちが住いにまで押寄せる騒乱の有様は、前年の内村鑑三の一高事件と酷似している。どれほどの心労があったことか。時代は丁度憲法、国会、教育勅語の制定発布発足のナショナリズムの高揚した時期に当り、近代国家体制の発足と共に起きた異様な排外思想と、久米事件も無縁ではないだろう。

続く七章では気質・言動・交際のタイトルで久米の人間像と家族、明治日本の指導者層を晩年に回顧した部分があり、これが抜群に面白い。鍋島閑叟、岩倉具視、木戸孝允そして記録のこよなきパートナーで早逝した畠山義成などが洒脱に語られて愉しめる。

終章では忘れられた史家とその作品がテーマの一つになり、久米や『実記』の忘却と復活のプロセスが語られている。素人の見解をあえて加えさせて頂ければ、久米事件以後の日本は殖産と戦争、そして混乱の時代が続き、『実記』が評価され読まれる世情ではなかったと思う。一方、欧米の側でも平和が回復すると世界の風潮の変化もあって、改めて自分たちの予想を覆した日本の革新―近代化成功に目を向け始め、その端緒となった岩倉使節団や『実記』に注目するようになったのではないかと思われる。

久米は七十才を過ぎて漸く一人の孫、晴さんを得た。長じて湯治の宿で執筆する最晩年の祖父につき添って世話をし、そのあと『実記』や遺稿を夫君と共に大切に保存された。先年、久米美術館の展示で『実記』や遺稿などを目にしたとき、晴夫妻の努力を天の恩恵のように思った。

長い時の流れを描いた本書を読み終えて、その恩恵を享受できる歓びを改めて覚えたのであった。

【寄稿】国士無双

桑名正行

大槻文彦『大言海』によれば、「国士」〔国中ニ秀デタル意、資格優秀ノ士。「史記、淮陰侯伝」蕭何日、諸将易得耳、至如信者、国士無双…〕。また、「無双」〔フタツナキコト。比ヒ無キコト。無二。〕とある。

岩波『漢語辞典』でも、【国士】国内で最もすぐれた人。「―無双」（その国でならぶ者のない、第一等の人物）、などとあり、「国士」と「無双」は、それぞれ別項となっている。麻雀の役満のひとつである「国士無双」といった四文字（四字熟語？）見出しは見当たらない。

さて、「実記を読む会」は登録メンバー約三十名、うち、コア（実動）メンバー約十五名、各人、年に一回（一巻）廻り持ち担当するペースで進行中。二ヶ月前に、担当の「巻」を決め、余り無理なく準備ができる。これまでの月例報告の内容たるや、それぞれ各様に充実していることは当紙部会報告でご覧の通りで、「多士済済」とか「一騎当千」といった四字熟語が脳裏にうかぶ。ここでは、とりあえず三氏を紹介する。

小林（富）氏は、大日本山林会名誉会長、斯界の権威。例会「実記五十六巻プロシア西部鉄道記」で、山林保護に関し広範な説明を頂いたが、その折、当時のドイツ留学生「松野磵」と木戸・大久保の人情味あふれる支援秘話は、第四十三号のコラムで泉代表が詳しく紹介済だが、小林氏の文人としての資質の一端を見る思いである。また、去る三月例会「実記六十二巻ロシア鉄道及びペテルブルグ総説」では、近時のシベリア林業に触れられ、地球温暖化が、シベリアのタイガ・永久凍土の変質〔アラスと呼ばれる大小のくぼ地（池）の乾燥化〕について、その惨状を貴重な「カラー写真」で解説された。今後、実記を読み進むにつれ「温暖化と森林」の視点から最新の知見に接することが期待される。

つぎに、堀江氏。世界の近代都市（首都）づくりに造詣が深い、つまり専門家の氏は、去る十月「実記六十四巻サンクト・ペテルブルグ市（中）」を報告の折、明治中期、東京が首都としての体裁をとり始めるに際し、当時の

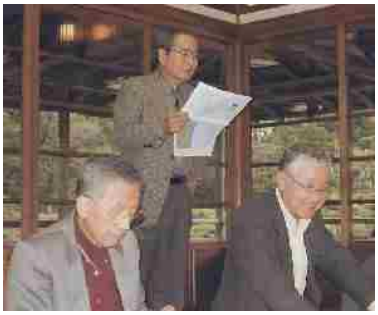
治世家（松方、山縣）の決断と、技術者の熱意がいかに決定的に重要であったか、を同氏の「論稿」で解説された。

「読む会」の行手には、ローマあり、ウィーンあり、フィレンツェあり、これら大都会に対する氏の論評やいかに、大いに期待される。

そして最後に、鵜飼氏。か の「富士通」を後背に、超最新ＩＴネットのエキスパート。三十数年前、同社超大型コンピューター（当時十五億円！）の設計・稼動の重責を担う。もっとも、その容量たるや、当今のＰＣ（十五万円！）にも劣るとて、その激変ぶりに今昔の感深し、とされる。氏は十二月十三日の「読む会」で「スウェーデン国の記（上）」を報告されたばかり、その内容たるや何ともユニークなものである。以下その大要を記してみる。

岩波版約二頁を、（Ｂ明治十一年版）、同じく（Ｂルビ版）、（Ａ）岩波版と、全く同じ文章三態をプリント、（Ａ）について、それこそ微細に分析、吟味、腐分けする。ここで氏は「未検証の仮説」なるものを提出する。曰く「この部分の原著者は久米本人ではない。（中略）久米さんだって人の子だ。膨大な報告に一様に力を入れたとは考え難い。」と。さて、果たしていかがなものか、侃侃諤諤の議論となる筈。鵜飼氏は、更に歩を進めて、「ディジタル実記」があれば「口語訳につぐ実記研究の新たな素材」になるほか、合わせて十二項目のメリットと課題を指摘、しかもちゃんと「ディジタル実記」作成手順まで要綱細目を具体的に提言しているから周到極まりない。

ついでにもうひとつ、鵜飼氏は、使節団追体験の旅で、オーストリアに行った際、名勝「セメリング」通過の折の久米の描写が過剰極まりなく、余りにも実際の景観とかけ離れている点を指摘、「察するに、この個処では、久米は居寝りしていたに相違ない、つまり後刻同行者の伝聞に基き、『実記』にあるような叙景記述を作った。」との判定を下した。「探偵鵜飼ホームズ」の誕生というべきか。前記の、久米さんだって人の子だ…は、鵜飼探偵のやさしさのあらわれでしょう。



12月例会で報告する鵜飼氏
（写真：橋本吉信氏）

「実記を読む会」がいかに、「面白くてタメになる」かを、例を引いて書いてみた。「団塊の世代」（に限りませんが）といった中堅層の積極参加を切望する。報告、担当、発表とか、こむずかしいことには一切ご懸念なく、一度「月例会」にお出かけください。

【寄稿】米欧亜回覧の会と写真

橋本吉信

当ニュースによって、会の現状、行事、部会活動を知ることができる。そして、「記事写真」は状況を印象づける効果とともに、アクセントの効いた紙面を構成する。

ＮＰＯ発足の際、山田事務局長から自主的な参加の呼びかけがあり、私にできることは何か、興味を持って継続できることは何かを考えてみた。「ニュースに載せる写真が是非欲しい」数年前のある日「英訳実記を読む会」から問合せを受けたことを思い出した。写真を撮る人は多くても、安定・継続的に各行事の模様を撮影し提供するとなると限られる。私は数名でチームを組めば可能だと考え、写真記録担当として総務部の一員に加えていただいた。

少年時代のピンホール・カメラに始まる写真愛好五十五年のアマチュアだが、撮影の機会を多く持つほど技術は向上すると考えている。三脚を構えてじっくり撮るよりもスナップショットで撮る方が好きで、外出する時は大抵カメラを携えている。大事な記念撮影を引き受けたときは、責任上、緊張感で集中力ができて良い経験になる。

写真は「一期一会」の賜物、後で捏造することはできない。撮影に臨む姿勢は、先を見通して行なう一般の取材と同じだと思う。予め行事の目的、登場人物、時間、プログラムの進行を理解して、シャッターチャンスを予測しながら余裕をもって撮影に取り組むことになる。

規模の大小、撮影対象が異なっても、撮影する場所を観察して、状況、光線、角度、距離、構図を把握しておく基本は同じである。

その写真の用途は何か、狙いは何か、ＶＩＰは誰かなどを心得て、撮影位置で動きの中の瞬間を待ってシャッターを切る。一瞬のタイミングに神経を集中し、生きた表情や情景を写し撮れれば記事を生かすことができる。良い結果は、シャッターを切った瞬間に手ごたえで感じる。

撮影対象は、シンポジウム、全体例会、部会、歴史探訪旅行など広範囲であり、偏りなく行事の記録と記事写真を残せるように計画的に取り組んでゆきたい。

フィルム式カメラからデジタルカメラへ、近年の技術進歩は目覚しく、撮影と画像情報の伝達手法は革命的に変り、安価で便利になった。芸術的作品を撮るために、高価なポジフィルムを使うプロやアマチュアも多くいるが、デジタルカメラがもたらした機動性と実用性は偉大である。

撮影後に色彩、明るさ、レタッチ、傾き、構図、トリミングなど、全画像の修正を手許のパソコンとプリンターで自由自在にできる面白さがある。処理の手間はかかるが、プリントが不要になり、費用は五～十分の一で済む。数百枚の記録画像でも一枚約八十円のＣＤに収めて郵送、少枚数の場合はメールによって、殆んどコストゼロで送信できる。会の予算に及ぼす影響はきわめて小さくなった。

設立五周年に藤原（宣夫）さんのご紹介で撮影を担当した縁で入会し、以来昨年の創立満十周年シンポジウムを含む諸行事、部会等の記録、記事写真の撮影に役立てて幸いである。今後も撮影と多面的な画像処理の技術を身につけ、会の記録と広報に役立てるように努めたいと思う。

実記を読む会報告

連絡　桑名 正行
Tel&Fax　03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

■第百十一回

十月四日、出席者十一名。第六十五巻「サンクト・ペテルブルグ市の記・下」を多田さんが報告

四月十日「夜来積雪朝来寒雨」、使節団一行は皇帝弟ニコライ大公に謁見、以降、軍服の縫製工場、鉱山学校の博物館、医学校付属の解剖学教室、製鉄所、コサック新兵の騎馬訓練見学などを経て、十四日サンクト・ペテルブルグ出発。

まず「ソ連崩壊直後のサンクト・ペテルスブルグ（レニングラード）の私の印象」として、一九九二年春の訪問時の印象を「謎めいた国、矛盾に満ちた国（トインビー）」と回想。続いて、ペーテル大帝とオランダ、ロシアにおけるお雇い外国人、コサック兵士の素性、ネフスキー通り、『赤露の人質日記』の著者エリセーエフ、エカテリーナⅡとエルミタージュ、ゴーゴリ・ゴーリキー・ドストエフスキー等々に説き及ぶ。「私の『実記』に対する不満？？」として、多田さんは、文学・絵画への言及が極めて乏しいことを指摘された。同感、しかし「それは無い物ねだりか！」と一同納得。なお、岡部さんより「津太夫のロシア抑留記『環海異聞』付録ロシア軍人・軍服の複製リトグラフ数葉』ご披露あり、目学問させて頂いた。

堀江さんの補講は、同氏論文『東京の市区改正条例（明治時代）を中心とした幹線道路形成の史的研究』（一九八二・十一月）をテクストとして展開された。「東京遷都に伴う「帝都」の道路整備」、「東京改造計画の台頭」、「東京市区改正計画の成案化」等、詳細を極めた大論文をご本人に解説して頂いた事が何よりのご馳走でした。

「近代日本と仏蘭西」を手に報告する国分氏

■第百十二回

十一月八日、出席者十一名。第八十七巻「仏国リヨン及びマルセイユの記」を国分さんが報告

使節団一行は、七月十五日スイスのジュネーブ発、夜「絹織ノ名所」リヨンに入る。マルセイユ港発までわずか四日間の二都市視察。

リヨンと言えば、フランス第二の銀行クレディ・リヨネは、国分さんの往時の勤務先。因みに、日仏絹貿易を支えた横浜正金銀行（リヨン事務所）には、明治四十年頃永井荷風が勤めていた（『ふらんす物語』）。

国分さん紹介の『近代日本と仏蘭西』（三浦信孝）によれば、明治のフランス仕込みの偉材として、思想・中江兆民、政治・西園寺公望、産業・渋沢栄一、美術・黒田清輝、文学・永井荷風という巨人のラインアップが認められる、と。米・英・独ではこうは行かぬようだ。当時の「花のパリ」を含むフランス文明の優位を感得させられる。

（文責）桑名正行

英訳実記を読む会報告

連絡　岩崎洋三
Tel &Fax　03-3488-0532
y-iwasaki@isr.or.jp

■第五十三回

十月十八日、出席者八名。第二巻英国編三十六章シェフィールド市の「鋼鉄製造所」見学部分を製鉄会社OBの岡部さんが、新日鐵の最新設備と対比もしながら詳細に報告。

ロール工程を見学時は片側十八人がやっとこで引っ張っていたのを、今や長さ四kmに巨大な設備をコンピューターを使って一人で操作できるとか、久米が「電線」と書いたものをtelegraph wireと英訳されたのは、まだ「電力線」が無かったせいだろうが、銅線でなくても良かったのかなど、論議が尽きなかった。

■第五十四回

十一月十五日、出席者八名。前回に引き続き永島さんが鉄道用車輪製造工場で、七トンのハンマーや大鑿で鋼鉄の大塊を車輪に加工する工程の詳細な描写部分を、次いで、久保田さんが「高慢と偏見」の舞台にもなったというChatsworth House訪問部分を報告。

「荘園主の年収は三十億円以上」をはじめ久米を上回る丹念な調査結果を興味深く拝聴した。

■第五十五回

十二月二十日、出席者十名。久保田さんが前回報告の残り部分を報告後、都合で三十七章に飛び、小林さんがシェフィールドから南下し、スタフォードシャーのバートン・オン・トレントに立ち寄り、オールソップ社を訪問した部分を報告。

この市は当時の英国におけるビールの代表的生産地で、二大醸造工場があり、オールソップ社はその一つであった。一行は二十万平米に及ぶ広大な敷地を、急拵えで椅子を設けた荷車に乗り、蒸気車に曳かれて移動し、樽製造工場、ビール醸造工場を見て廻る。区画の変るところに設けられた自動開閉の門扉について、圧力で動作するという説明があり、その機構について意見が出された。また、工場に試験分析室が設置されているのを見て、これが科学技術の進歩に貢献していると言う見解を述べている。

（文責）岩崎洋三

現未来部会の現況

連絡　塚本 弘
hiroshi.tsukamoto@.eu-jyapan.gr.jp

■十一月二十八日

出席者は十四名。当初予定は、前回の藤井裕久氏に続き「政治家に聞く」シリーズだったが、混迷国会の煽りで日時が合わず、久しぶりに会員同志の討論を行った。テーマは「日本政治の今後のあり方を考える」。

西井幹事が「望ましい国の姿とは、国民ひとりひとりが、安心して暮らし、自分の生き方に誇りを持ち、出来れば他国の尊敬を受ける」とデッサンし、現在の重要課題として列挙した①憲法改正

問題を直視する。②戦争責任の反省。③安全保障体制の再構築。④経済政策の基本姿勢。⑤政官財の腐敗状況の打破。⑥財政危機の打破。⑦地球環境保全。の七項目の趣旨を聞いて討論の焦点を絞ることとした。

出席者全員で夫々重要度順に三項目を選択し、三点、二点、一点と付け、合計点の最も多い憲法改正問題と地球環境保全が十六点の同点となり、多数決で憲法改正問題が本日のテーマとなった。因みに、安全保障十三点、戦争責任十一点、経済政策八点、政官財の腐敗と財政危機が各七点だった。

憲法問題は、平成十七年七月と九月の二度にわたり議論をし、第三十八回例会でも「憲法改正イエスかノーか」で討論したという経緯がある。憲法制定後六十年を経てもなお古くて新しい問題として議論が尽きることがない。その理由はいうまでもなく国の基本問題であり、時の政治、経済、社会生活との関わりが大きく、右から左まで様々な意見があり、その都度新たな視点も加味されるからであろう。

今回の議論も、定番の、自主憲法ではないとか、第九条を巡る議論、解釈改憲論議も限界だとかの議論があったが、自衛隊の海外派遣や集団的自衛権の問題、ねじれ国会による国会審議膠着状況打開の視点など、時勢の変化を反映した議論もあった。

今回も何か結論を得るということではなかったが、憲法改正国民投票法の成立を受けて憲法を巡る論議は、今後も更に議論の場が持たれると思われる。

なお次回は、「地球環境問題」を議論する予定。

（文責）小田仁彦

現未来部会
（11月28日・国際文化会館）

歴史部会報告

連絡　小野 博正

mi040031-9697@tba.t-

■十一月五日

元文春、週刊文春、諸君！などの編集長歴任の堤堯氏による『戦後史最大の謎』の講演内容を報告する。

堤氏の著書に、『昭和の三傑―憲法九条は救国のトリックだった』がある。憲法九条は、占領軍（マッカーサー＝以下マック）又はアメリカの押し付け憲法だというのが定説であったが、疑問を感じ、学生時代から資料を読み漁り、眼光紙背に徹して、事実を汲み取る努力を重ねた。

実は、昭和四十六年一月二十四日の、マック・幣原会談で、いきなり、幣原が人間天皇（象徴天皇）と抱き合わせで、戦力放棄を発案して、マックを飛び上がるほど驚かせたという。マックは、あれは幣原発案だったと、上院の聴聞会、七十五歳の祝賀会、回想記の三度に亘り述べている。一方、幣原側にも、それに符合した証言が見られる。（幣原の枢密院での草案説明、親友・大平駒槌への談話、側近・平野三郎への談話など）つまり、この二者間の、その後の発言に齟齬はない。幣原は、マックに対して、この提案は貴方からの命令だとしてくれと頼んでいる、幣原が言い出したといったら、国賊ものとして、日本国内は治まらない。占領軍の強制だということでなければ、国民は納得しない。一方、戦勝国で作った極東委員会でも、天皇を死刑にすべきだとか、退位させるべきだとかの意見が根強くあって、それを押さえるためには、戦力放棄は極東委員会を納得させる決定的な一撃だ。

マックは日本の戦後統治には、天皇制維持は必須と感じており、彼は天皇を好いていた。幣原は、戦後の復興を考え、すべての財政を経済一筋に注ぎ、軍部の台頭を防ぐには、この手しかないと感じていた。これが、幣原が考えた救国のトリックだった。鈴木貫太郎・吉田茂も幣原と同様で、よくその方向性を支えた三傑である。

然し、堤氏は言う。「憲法九条が、機能してきたのは日米安保があってのことで、本来非武装中立は非現実的で、戦後は中米のコスタリカ一国だけだ。中立で国を守れるはずがなく、今、米国が日米安保より、米中の関係強化に動き出している。日本も、持つべき自衛権を復活するために、一項の平和憲法は残し、二項を削り、防衛軍を復活する時であろう。」と。

（文責）小野博正

堤堯氏
（11月5日・歴史部会）

関西支部報告

連絡　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第四十一回

十月二十日、出席者十一名。会員で甲子園大学の近代経営学部准教授の松田裕之氏に「電信で読み解く南北戦争」の題目でお話頂いた。

連邦陸軍通信隊USMTCsは正規部隊ではなく、陸軍省直轄ではあるが民間人から構成された軍属組織であった。後に鉄道王として名をはせるA・カーネギーもペンシルバニア鉄道の電信技士として参加し活躍する。民間人であるUSMTCsの通信士の隊員たちは、飛び交う銃弾と炸裂する砲弾の危険極まりない戦場電線を架設し、敵の破壊活動に対して修復を行い、モールス電信機を操作して暗号電文の送信、受信を行った。

彼らが担った通信こそが、大規模な兵員の移動、物資の兵站輸送、中央行政の戦争指導、方面司令部と前線部隊との緊密な連携など近代総力戦に必須の情報と統制の原型となった。南北戦争は、ハードウエアである火器の性能の飛躍的向上と共にソフトウエア面での先駆けでもあった。

（文責）難波康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会　員　上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回くらい全体例会をもちます。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員（年会費3, 000円）の特典もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」（2007年7月17日より）
〒170-6045 東京都豊島区東池袋3-1-1
サンシャイン60　45階
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:03-5979-2273　FAX:03-5979-2552

入会申込
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ
メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ　等
書籍・ＤＶＤ案内も掲載
http//www.iwakura-mission.jp

＜催し案内＞
2008年1月～2月の予定です

☆新年懇親例会
日　時：1月25日（金）　18：30～20：30
（開場18：00）
テーマ：ロシア

ニコライ橋
（『実記』第65章）

場　所：レストラン・アラスカ
日本プレスセンタービル10階
（日比谷公園西側、図書館向かい）
03-3503-2731
会　費：8,000円（学生3,000円）
ピアノ：碓氷俊樹（賛助出演）
芸大卒。ウクライナ・キエフのデビューリサイタルで絶賛される。

☆実記を読む会
日　時：1月10日（木）　18:30～21:00
2月14日（木）
3月13日（木）
場　所：国際文化会館 Ｅルーム
会　費：1,000円

☆英訳実記を読む会
日　時：1月24日（木）　18:30～21:00
場　所：財）統計研究会会議室
港区新橋1-18-16　日本生命ビル７階
会　費：1,000円

☆立春大放談の会
日　時：2月 4日（月）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館セミナールーム
テーマ：キャッチフレーズ、面白企画の自由討論
（「現代語訳実記・普及版」等の普及促進策）

☆関西支部例会
日　時：1月19日（土）　12：00～16：30
＊昼食不要の方は13：00より
場　所：大阪弥生会館
会　費：1,500円（昼食代別途1,000円）

編集後記

◇「現代語訳・米欧回覧実記」によって飛躍的に『実記』が身近になったが、二万五千円（セット価格）が大きな壁となっていた。しかし、待望の『実記』普及版の刊行が五月に実現することになった。これを好機として、新年度は会の活動に弾みをつけたいものである。

◇四、五頁紙面は、趣向を変えて、会員の方に執筆をお願いしました。年末の多忙な時期に、「さすが」の原稿をありがとうございました。中村さんは、十一月例会の講演テーマである高田誠二著「評伝・久米邦武」を丁寧に読み込んでいただきました。また、本号の全ての写真を撮影した橋本氏は、文章からもその誠実さが伝わってきます。

桑名氏（「読む会」幹事）原稿の最後の段落…実は、「一騎当千」、「多士済済」までは良かったが、つい「国士無双」と口走ったばかりに、泉代表より、「国士無双」の見出しで、早速、何か一文を書くように、と相成った次第である。…によって、執筆者の年末の状況の一端がご想像いただけると思います。この段落をはじめ、だいぶ割愛させていただいたことをお三方にお詫びいたします。（N）